織田信長のマネー革命

経済戦争としての戦国時代

武田知弘



ソフトバンク新書
167

需要全本请访问 www.ertongboo

著者略歴

武田知弘（たけだ・ともひろ）

1967年福岡県出身。西南学院大学経済学部中退。1991年大蔵省入省。バブル崩壊前後の日本経済の現場をつぶさに見て回る。1998年から執筆活動を開始。1999年大蔵省退官、出版社勤務を経てライターとなる。
主な著書に『ヒトラーの経済政策』（祥伝社新書）、『戦前の日本』（彩図社）、『ワケありな日本経済』（ビジネス社）。
ブログ：武田知弘ブログ
http://blog.goo.ne.jp/takedatomohiro

ソフトバンク新書　167

織田信長のマネー革命
経済戦争としての戦国時代

2011年7月25日　初版第1刷発行

著　者：武田知弘

発行者：新田光敏
発行所：ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒106-0032　東京都港区六本木 2-4-5
電話：03-5549-1201（営業部）

装　幀：ブックウォール
組　版：アーティザンカンパニー株式会社
地図作成：有限会社 地図屋もりそん
印刷・製本：図書印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。本書の内容に関するご質問等は、小社学芸書籍編集部まで書面にてご連絡いただきますようお願いいたします。

© Tomohiro Takeda　2011 Printed in Japan
ISBN 978-4-7973-6369-2

織田信長のマネー革命

――経済戦争としての戦国時代

常州大学山书馆
藏书章

武田知弘

ソフトバンク新書　167

まえがき

織田信長というと「天下布武」に象徴されるように、武力で天下を手中に収めかけた人物として知られている。必然的に「桶狭間の戦い」や「長篠の合戦」などその華々しい軍事的成功ばかり目につきがちである。

しかし実は信長は、日本の経済史、金融史において非常に大きな功績を残しているのである。信長以前と信長以降では、日本の経済社会は明らかに違う。信長は、ある意味「マネー革命」とさえ言えるような大改革を実施しているのだ。

江戸時代、日本は欧米に負けないほど貨幣経済が発達していた。この貨幣経済の発達は、信長が大きく関係しているのである。信長は、中央政権としては初めて体系的な貨幣制度を作り、物量単位の統一や関所の撤廃などで、日本の商経済に大変革をもたらした。

この信長の経済政策が、世界に冠たる〝経済大国日本〟のベースを作ったとも言えるのだ。また現代の日本では、津々浦々によく整備された都市が存在する。この都市の存在も、もとを

需要全本请访问 www.ertongboo

たどれば信長に由来するのである。信長は岐阜や安土に、「政庁」と「交通の拠点」を融合させた〝新しい城下町〟を作った。この新しい都市政策は、すぐに全国に波及した。今、日本の各地にある中小都市のほとんどは、もともとは岐阜や安土をモデルとしているのである。つまり、信長は日本の都市の形を作り上げたといえるのだ。

このように、信長は日本経済社会の礎を作ったともいえるのだ。

歴史というものは、「出来事」「事件」を中心に論じられることが多い。

しかし「出来事」ではなく「経済視点」で歴史を検討すると、今まで見えなかったものが見えてきたりすることがある。

信長の生涯についてもそうである。

経済視点から信長を眺めれば、今まで語られてきた信長像とは別のものが見えてくる。彼は冷酷なだけの為政者ではなく、むしろ民衆には非常に優しかったのである。筆者は特にそれを紹介したくて、本書を執筆した次第である。

本書を読まれた後、おそらく信長の意外な姿に驚かれるはずである。

目次

まえがき　3

序　章　信長はいかにして軍資金を調達していたか？　9

鉄甲船に秘められた信長の経済力／錬金術のキーワードは「寺」「城」「港」／寺社の持っていた莫大な利権を奪う／築城するたびに富が集まるという謎／信長の城は巨大な税務署だった／太閤検地のモデルとなった信長の検地／日本最初の不動産デベロッパー／〝竹中工務店〟の創業者は信長の重臣だった／楽市楽座は信長に何のメリットがあったのか？／信長は領地より港を欲した／港を押さえれば、莫大な収益が上がる／「桶狭間の戦い」は商業地をめぐっての戦いだった／信長の作った戦争税とは／キリスト教容認に隠された信長の海外戦略

第1章　日本の経済システムは信長が作った!?　47
楽市楽座だけじゃない！　経済史上に残る偉業の数々／日本の金融システムは信長が作った／信長の作った金銀本位制／金銀の通貨流通を促進させる／金銀は大量生産さえすれば貨幣として流通するわけではない／遠隔地の物流を促進する／史上初の公定〝金貨〟の鋳造／信長はどうやって大量の金を集めたのか？／「名物狩り」で大量の金を市中に放出した／武田信玄の甲州金はなぜ流通しなかったのか？／枡の大きさの統一／関所の撤廃／日本全土の道路網整備計画／〝価格破壊〟をもたらした楽市楽座

第2章　長篠の戦いは〝経済戦争〟だった　79
「長篠の戦い」の真実／実は武田信玄は鉄砲の権威者だった／一五歳で鉄砲五〇〇挺を入手した信長／信長が目をつけた国際港「堺」／堺は日本最大の軍需都市だった／堺を手に入れることは有力大名になることと同じだった／堺商人をなびかせた信長の手腕／死の商人「今井宗久」とは／武田信玄を経済封鎖せよ／鉄砲はあっても弾薬がなかった武田軍／信玄の西上作戦……追い詰め

れていたのは信玄の方だった

第3章　延暦寺の焼き討ちは〝大財閥〟の解体だった　101

強大な〝支配階級〟としての寺社／比叡山は、戦国時代最大の財閥だった／延暦寺は全国に領地（荘園）を持っていた／悪徳金融業者の横顔を持った比叡山／商業、物流も支配していた比叡山／実は平安時代から比叡山は社会の悩みの種だった／信長の一四〇年前にも比叡山は焼き討ちされていた／〝楽市楽座〟を最初に行った石山本願寺／本願寺は畿内の流通拠点を押さえていた／海外貿易まで企んでいた本願寺／京都、堺を占領していた法華経／寺院は要塞都市だった／武器の製造基地としての寺社／現代日本が宗教の弊害を被っていないのは、信長のおかげ

第4章　安土城〝テクノポリス〟構想　131

現在の都市の形を作った信長／商都と軍都を融合させた複合都市／極彩色の東南アジア的な〝安土城〟／〝お城〟の原形は安土城／〝都市計画〟の走り／安土〜京都間に造られたハイウェイ／安土

で本格的な兵農分離をはじめる／当時、最高の技術を集めて造られた安土城／遊び心満載の安土城／サービス精神旺盛な為政者／安土城は日本で最初のテーマパークだった／安土城は大相撲の聖地／近江商人を育てた信長

第5章　信長の〝理想国家〟の行方　161

実は領民に優しかった信長／信長以前、農民は重税に苦しんでいた／石高制の採用／信長の減税政策の意図／弱者救済政策と庶民への配慮／罰金で徴収した黄金を庶民のために使う／中間搾取を極力減らす／朝廷の立て直し／「茶会を開く権利」を褒美として与える／日本の首都は大坂になっていただろう／〝信長安土大社〟計画

あとがき　189

参考文献　192

序　章　信長はいかにして軍資金を調達していたか？

需要全本请访问 www.ertongboo

鉄甲船に秘められた信長の経済力

「鉄甲船」は、信長の生みだした新兵器の一つである。

信長は、軍事的な発明をいくつもしているが、その中でも最高傑作といえるのが、この鉄甲船だろう。

鉄甲船の造られた経緯は、次の通りである。

天正六（一五七八）年、信長が石山本願寺と戦っているとき、信長軍は大坂湾を海上封鎖し、兵糧攻めにしようとした。しかし、石山本願寺を救援に来た毛利水軍に海上封鎖を破られ、兵糧を補給されてしまった。

これに怒った信長は、九鬼嘉隆に毛利水軍に負けない軍艦の建造を命じた。

毛利水軍は火矢や焙烙玉などを効果的に使い、九鬼水軍はこれに手を焼いた。焙烙玉というのは、現代の手榴弾のようなもので、船を延焼させる威力があった。それを見た信長は、燃えない船を造るように指示したのである。

その結果造られたのが鉄で武装した「鉄甲船」である。『信長公記』には、この鉄甲船のこと

が次のように記されている。

天正六（一五七八）年六月、この艦隊を大坂に派遣したところ、雑賀、谷の輪など浦々の小舟が数知れず漕ぎ寄せ、矢を放ったり鉄砲をうちかけて攻撃してきた。九鬼軍の六隻の大軍艦には大砲が積んであり、敵を引き寄せておいて、大砲をいっせいに放って敵の船を多数破壊してしまった。その後は、敵もなかなか近付いて来ず、難なく堺へ着岸することができた。

同年一一月には、毛利水軍六〇〇隻が木津方面へ進出し、これを九鬼水軍が迎え撃った。九鬼水軍の六隻の大軍艦は、毛利軍の大将船と思われる船を間近に引き寄せて砲撃し、破壊したため、毛利軍は恐れをなしてそれ以上寄せてこなかった。

この鉄甲船は、記録が少ないために謎の部分が多く、「本当に鉄甲だったのか」「どの程度、鉄を使っていたのか」など、詳細な部分はわかっていない。今から四〇〇年以上も前に、鉄貼りの船があったなどということは、にわかには信じがたい部分でもある。

しかし信長軍が大砲を積んだ大船を造り、毛利水軍を撃退したことは事実である。そしてこの鉄甲船には、信長の経済戦略の粋が集められているといえる。

鉄は、当時、貴重品だった。刀など鉄で造られたものは、非常な貴重品だったのだ。その貴重品を船の全面に貼り付けるというのだから、どれだけの費用がかかったことか。

当時日本にいたイエズス会宣教師のオルガンチノがルイス・フロイスに宛てた手紙の中に、この鉄甲船について次のような記述がある。

信長は日本で最大の船を七隻造り、堺の港に置いた。この船は華麗でポルトガルの船のようだった。

そして特筆すべきは、このくだりの後に「この船には大砲が三門積んであり、それがどこからもたらされたものかわからない」と書いてあることだ。オルガンチノはさらに次のようなことも述べている。

日本では豊後の大友宗麟が小さな砲を造っているだけで、大砲を造るものはいないはずだ。

なのになぜ信長の船に大砲が積んであるのか。

船には無数の精巧な長銃も備えており、毛利方が大坂（本願寺）を救援するのは不可能である。近々大坂（本願寺）は滅ぼされるだろう。

当時、大砲などは南蛮貿易によってもたらされてきた。そして、日本の南蛮貿易を取り仕切っていたのは、イエズス会の宣教師たちだった。彼らは、日本でのキリスト教の布教と引き替えに、貿易を行ったのである。だからこそ西国の大名はこぞってキリスト教を受け入れたのだ。

このような事情があったので、宣教師たちは日本の軍備状況などにも詳しかった。そして彼らが把握している限りでは、日本で大砲を造れるのは、豊後の大友宗麟だけだったのだ。大友宗麟は、西洋からの武器を輸入するため、国を挙げてキリスト教の受け入れをしてきた。そのためイエズス会としても大友宗麟には便宜を図り、砲の鋳造方法も教えたのである。

しかし、それでも大友宗麟が造れる砲というのは小さいもので、信長の船に載っているような大砲ではない。では、信長はどうやって大砲を入手したのか？

考えられることは二つある。

当時、鉄砲はすでに国産化されており、その性能は西洋人が見ても驚愕する程のものだった。だから、その技術をもって大砲も造ったのではないか、ということである。

もう一つは、南蛮船を経由せずに、大砲を輸入したのではないか、ということである。当時は、南蛮船以外にも明や倭寇の船が、東南アジアから日本へ入ってきていた。彼らが大砲を東南アジアで手に入れ、日本に持ってきたという予想もたてられる。

現在の段階では、鉄甲船の大砲をどうやって入手したのか、確定する資料は見られない。いずれにしても、信長は当時の戦国大名としては桁外れの経済力を持っていたことだけは確かである。

錬金術のキーワードは「寺」「城」「港」

信長というと、「桶狭間の戦い」や「天下布武」で知られるように、その類まれな軍事的センスで天下統一を果たそうとしたと思われている。確かに信長は軍事力によって敵将をなぎ倒し、領土を広げていった。

しかし、実は信長はマネー戦略においても非常に優れていた。というより、信長が強力な軍を

持てたのは、マネー戦略のたまものだと言ってもいい。

たとえば信長は「兵農分離」や「鉄砲の大量使用」で敵国を蹂躙してきたが、「兵農分離」にも「鉄砲の大量使用」にも、多額の費用がかかるのだ。農閑期だけ動く農民兵より、一年中動ける常備兵の方が強いに決まっている。しかし常備兵を持つには、それを雇用するだけの経費がかかるのである。

また鉄砲という新兵器を大量に持っている方が、戦争に強いのは当然である。しかし鉄砲を大量に用意するには、まずなにより金がいるのである。他の武将にはそれができず、信長にそれができたということは、信長はそれだけ経済力を持っていたということである。つまり信長は軍事力というより、経済力で敵を圧倒してきたのである。

実は信長は、かなり早い段階から相当経済力をつけていたようである。

『信長公記』には、斎藤道三と対面したときには、すでに五〇〇人の弓・鉄砲隊が組織されていたと記されている。また将軍足利義昭を擁して上洛したときには、朝廷や幕府の再建費にも莫大な寄贈をしており、当時「信長公は金、銀、米、銭に不足することがなかった」とも記されている。

需要全本请访问 www.ertongboo